新約聖書の中の祈り　第 18 回

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「書簡における祈り」・・・・パウロの書簡の中から、23 の祈りの事例を見る。本日は、第 11 から第 13 の、3 つの事例。

11. ≪信者たちの祈りによって≫　ピリピ 1：19　というのは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の支えによって、私が切に期待し望んでいるとおりに、このことが結局は私の救いとなることを知っているからです。

(1)　「あなたがたの祈りによって」・・・ピリピの信者たちがパウロのために祈っていた。なお、ピリピ 1：3～11 では、使徒パウロがピリピの信者たちのために祈っていた。

(2)　ピリピの教会が形成された経緯

①　ピリピは、マケドニアの主要な町のひとつ。第 2 次伝道旅行において、「聖霊」と「イエスの御霊」の導きを受けて、パウロとその一行は、マケドニアに渡り、ピリピに来た（使徒 16：6～12）。

②　使徒 16：13～14a　ピリピの祈り場で、安息日の集会に集まって来た女たちに、パウロが話をした。その中にリディアという名の女の人がいた。ティアティラという町の出身で、紫布を扱う商人であった。

- 祈り場・・・町ごとにそこに居留するユダヤ人たちは、安息日には自分たちの会堂に集まった。その町にまだ会堂がなければ、町の外の川岸などに集まった。そのような場所が、祈り場である。安息日だけでなく、平日でも祈りの時間には、そこに集まったので、「祈り場」（16：16）と呼ばれた。
- 14 節「神を敬う人であった」・・・この表現は、彼女がユダヤ人ではなく、異邦人であったことを示す。当時、ユダヤ人たちは、改宗まではしていないが聖書の神を信じる異邦人を、「神を敬う人」と呼んだ（参照　ルカ 7：2～5、使徒 17：4）。

③　使徒 16：14b～15　神はリディアの心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた。そして、彼女とその家族の者たちは洗礼を受けた。彼女は、パウロたち一行を家に招き、宿泊させた。

- 「～と懇願し、無理やり私たちにそうさせた」・・・当時のユダヤ人は、異邦人の家に入ること、一緒に食事すること、そこに泊まることはしなかったからである（参照　使徒 10：28）
- リディアのことばが記録されている。「私が主を信じる者だとお思いでしたら、私の家に来てお泊りください」・・・かつては神の祝福の外にあった異邦人も、信仰によって、今やユダヤ人信者とともに、神の国の共同市民、神の家族である（エペソ 2：11～3：7）。リディアのことばは、「この福音」（エペソ 2：17、3：7）の上に立って、パウロたちユダヤ人信者を愛し、交わりを求めたものである。

④　リディアに続いて、ある事件をきっかけに、ピリピの監獄の看守とその家の者全員が救われた（使徒 16：16～34）。

- 看守も洗礼を受けたあと、パウロとシラスを家に案内して、食事のもてなしをし、神を信じたことを全家族とともに心から喜んだ（使徒 16：34）

⑤　ピリピの教会は、このように、リディアや看守といった信者たちを初期のメンバーとして形成されていった。

(3)　ピリピの信者たちによる宣教活動支援

①　パウロたち一行は、ほどなくピリピを発って、テサロニケに（使徒 17：1～10）

- ピリピの信者たちは、テサロニケに行ったパウロたちを経済的に支援した（ピリピ 4：16）。

②　パウロたち一行は、テサロニケからさらに、ベレアへ（使徒 17：10～14）。ここまでは、マケドニア地方の中。このあと、パウロはマケドニア地方を出て、ギリシアの町アテネへ（使徒 17：15）

- パウロがマケドニア地方を出たあとも、ピリピの信者たちは経済的に支援した（ピリピ 4：15）

③　パウロは第 3 次伝道旅行の最後に、マケドニア地方を通って、信者たちを励ました（使徒 20：1～2）。そのあとギリシア、そして再びマケドニアへ戻ってそこからトロアスに渡り、エルサレムへと向かった。

④　パウロはエルサレムで収監され、カイサリアに移送され 2 年間の収監、そしてさらにローマに移送され、そこでも 2 年間の収監を受けた。ピリピ人への手紙は、このローマでの収監中に書かれたもの。

- ピリピ 4：14「それにしても、あなたがたは、よく私と苦難を分け合ってくれました」・・・ピリピの信者による支援は、継続していた。

- ピリピ 4 : 18「エパフロディトからあなたがたの贈り物を受け取って、満ち足りています。それは芳ばしい香りであって、神が喜んで受けてくださるささげ物です」
  - 獄中のパウロに対して、ピリピの信者たちは贈り物をした。
  - 宣教活動を支援する献金・贈り物は、信者が神にささげる捧げ物である。「芳ばしい香り」とは、神殿に置かれた香の祭壇で祭司がたく香を指す。神殿の中で立ち上る香の芳ばしい香りを神が喜んで受けてくださったように、ピリピの信者たちがパウロを支援した献金・贈り物を、神は喜ばれた。

(4) 祈りの内容・・・「あなたがたの祈りによって」、下線部の原語ギデエーシスは「願い求め」を意味する。具体的には記されていないが、パウロたち一行の宣教活動のために祈ったのであろう。旅費などの必要が満たされるように、迫害や妨害などいろいろな危険や困難から守られるように、福音宣教が前進しますように、など。

(5) パウロの確信・・・「私が切に期待し望んでいるとおりに、このことが結局は私の救いとなることを知っているからです」

① 「このこと」＝1 : 12「私の身に起こったこと」＝1 : 13「私がキリストのゆえに投獄されていること」
- 20 節「どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り」・・・「どんな場合にも」、投獄されているような現状でも、ということ。→　使徒 28 : 16，30～31

② 「私の救いとなる」・・・獄中にあるということも、パウロにとって暗殺の危険から守られ、福音を宣べ伝える使命を果たすことができる、ということになる（背景　使徒 23 : 20～21）

(6) パウロを救うための手段　２つ

① あなたがたの祈り＝ピリピの教会の信者たちによる祈り

② イエス・キリストの御霊の支え・・・「支え」と訳されている原語の基本的な意味は、必要な物資を供給すること。金銭的・物質的なサポートを意味する。
- このサポートは、直接的にはピリピの教会の信者たちから出ていたが、それは、ピリピの教会の信者たちが「イエス・キリストの御霊」によって導かれたものである。
- 宣教の働きに従事する者は、信者たちからの支援を、メシアから与えられたものとして理解する必要がある。

12. ≪感謝をささげる祈り≫　コロ 1：3　私たちは、あなたがたのことを祈るときにいつも、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。
    (1) 「私たち」・・・コロ 1：1、「神のみこころによる使徒パウロと、兄弟テモテから」
    (2) 祈りの宛先・・・父なる神
    (3) 誰のための祈りか
        ① 「あなたがたのことを祈る」・・・コロサイの教会の信者たちのため
        ② 「祈るときにいつも」・・・1 回だけの祈りではなく、しばしば祈った
            - パウロは、日々の祈りの時間の中で、個々の教会のために祈るということを習慣としていた。
    (4) 祈りの内容・・・感謝をささげる祈り
        ① 1：4　「キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛について聞いたからです。」
        ② コロサイの教会の信者たちがしていた信仰の証しについて、感謝すること。その感謝は、神にささげられる。

13. ≪霊的成長を願う祈り≫　コロ 1：9　こういうわけで、私たちもそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたが、あらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころについての知識に満たされますように。
    (1) 「こういうわけで、私たちもそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています」
        ① 「絶えず」・・・パウロたちは、継続的に、そしてしばしば祈っていた。
        ② この祈りは、コロサイの教会の信者たちのための祈りである。

    (2) この祈りにおいて、コロサイの教会の信者たちのために願い求めたこと・・・それは下線部、「あなたがたが、神のみこころについての知識に満たされますように」。「知識」と訳されている原語は「完全な知識」を意味する。

    (3) それは、何において可能なのか・・・二重下線部である。「あらゆる霊的な知恵と理解力によって」
        ① これは、人間の知恵や理解力ではない。言い換えれば、「キリストにあって」である。
            - 「神の力、神の知恵であるキリスト」（Ⅰコリ 1：24）
            - 「キリストは私たちにとって神からの知恵」（Ⅰコリ 1：30）
            - 「**このキリスト**のうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています」（コロ 2：3）・・・「このキリスト」とは、信者の内に住んでおられるキリスト（コロ 1：27）である。

② よって、神のみこころについての完全な知識に満たされるのは、神のわざであり、それは神によって与えられるもの、神の恵みである。人間の努力によるのではない。

(4) 同時に信者には、その恵みに応答して神のみこころに沿うように信仰生活を送ろうとする責任がある。パウロは、続いて 10 節で、次のように祈る。「また、主にふさわしく歩み、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる良いわざのうちに実を結び、神を知ることにおいて成長しますように。」（コロ 1：10）　ここには 3 つのステップがある。神を知ることは、①と②により霊的に成長した結果である。

① 第 1 ステップ・・・**主にふさわしく歩む**。具体的には、**主に喜ばれるように**、という思い、**主の愛に応答していきたいという願いに基づく行動**である。

② 第 2 ステップ・・・**あらゆる良いわざのうちに実を結ぶ**

③ 第 3 ステップ・・・**霊的に成長していって**、神を知る完全な知識に達する

(5) 何によって主にふさわしく歩むことができるのか、パウロは 11 節と 12 節で 3 つのことを語る。

① 11 節「すべての力をもって強くされること、そのような力は、神の栄光の力によって与えられる

- 「神の栄光の力によって与えられる」とは、神の光の中を歩むことで力が与えられるということ　Ⅰヨハネ 1：7～9

② 11 節「すべてのことに忍耐し、望みを持ち続けること」

③ 12 節「喜びをもって、父なる神に感謝をささげること」・・・感謝をささげるべき理由 2 つ（12 節と 13 節で）

- 12 節「（父なる神は）　光の中にある、聖徒たちの相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった」
- 13 節「（父なる神は）　私たちを暗闇の支配から救い出して、父なる神が愛する御子のご支配の中に、私たちを移してくださった」
  - ➢ 人間の死の時を決める権限は、悪魔にある。
  - ➢ しかし、キリストが十字架の死によって悪魔の力を打ち破ったので、信者の死の時については、もはや暗やみの支配、すなわちサタンの支配のうちにはない。信者の死の時は、御子＝キリストが決める。
    - ✧ 「死の力を持つ者、すなわち悪魔をご自分の死によって滅ぼし」（ヘブル 2：14）
    - ✧ 「キリストによって眠った人たち」（Ⅰテサ 4：14）